

# 草鹿砥宣隆

井上豊

草鹿砥宣隆は三河國の生まれで、平田派の有力な国学者であった。佐佐木信綱博士の「日本歌学史」に歌格の研究書の簡単な紹介があるほか、学界ではほとんど問題にされずに来たが、橋本進吉博士が、宣隆の著「古言別音鈔」をとりあげ、万葉仮名に開し独自の研究を進められてから、国語学の方面からも注意をひくようになった。しかし生涯や学統著書などについて疑問が多く、系統だった考察も行なわれていないようであるから、全体の輪郭を明らかにしておきたい。

従来宣隆を紹介として比較的にまとまっているのは、久米康裕編「三河知名人士録」の記事である。

宝飯郡一宮村砥鹿神社祠官草鹿宣輝の長子で、文政元年四月九日生る。幼名孫十郎と云ひ、初め勘解由、通称近江又は近江守、別に松とも云った。初め八名郡豊津村田中某に就き漢学を学び、次いで美濃国加納の儒者吉田東堂の塾に入り、更に平田篤胤の門に入りて皇学を修め、石塚竜麿に就て古代文字遺を研究した。天保六年従五位下に叙し、近江守に任ぜられ、明治元

年京都に徴せられ、皇学所講官に仰付られ、同二年六月廿一日京都清和院門前中屋舗の寓居に急病にて歿した。年五十二であった。同月金二万匹を賜はつた。著書に、祭典略、祭文例、古言別音鈔、旋頭歌抄、神徳略述頒諺解、説文索引、等二十四卷がある。而して古言別音鈔は師石塚竜麿の名著「仮名遣奥の山路を整理したもので、今京都大学に一本を伝へてゐる、云々。

「二河知名人士録」はこの種のものとしては、比較的に信用すべきもので、宣隆についても右の記事で大体の輪郭がわかるが、家系や学統著書などについては詳しくなく、誤記もまじっている。

より基礎的な資料としては、羽田文庫旧蔵「草鹿砥宣隆書簡集」に「附録其七」として載せられた羽田野敬雄筆の「草鹿砥宣隆履歴」がある。有力な資料と思われるので、全文を掲げる。

おのが学弟なる草鹿砥近江守宣隆の神主は、肥前守宣輝神主の嫡子にして、幼ナ名を勘解由、一ノ名を松、家の号をバ杉の金戸と称へり。父主はおのれとともに平田の翁の教へ子なりければ、かの主も十七歳の時名簿を奉りて皇学にいさをしかりしことはいまさらにいふべくもあらず。幼き時より才賢く、書よむ事をいみじく好みて、遠江人八木ノ美穂によりて古へ風の歌文を

もよくものせられ、蕃学をば美濃ノ加納ノ藩士吉田ノ東堂の門に入りていそしみ学び、手かくことを好みて、殊に立書といふ筋にふかく心を用ひて、其群の徒にもをさく恥ずとぞ。大かた世に書よみてほこらふ人にはいと多なれど、皇学に明らかなれば蕃学にうとく、蕃学に精しければ皇学にくらく、おのが如きはゆる不具の人のみ多かるを、櫃の突の独りぬけ出て、かの菅原大神の宣まへる和魂漢才を兼ね備へたるは此ノ人なん有ける。おのれはかの稚童の昔より殊に深く交りて、四十年余りをたゞ一日の如く睦魂あひて過せれど、何ひとつ上にたつ事なきを常に思へど、したにはいと悦びつゝ、行末ゆかしと思頼みのみぞ有ける。さるを去歳のしも月、掛巻くもあやに恐き皇朝庁なる皇学所に徴出されて、万たど／＼しきに、寒気にさへおかされて、いともくるしかりしかば十二月のはつかの日御講義の終なりければ、しばしの御暇を乞奉りて国に帰りしを、かの主はいよいよはげみつつ講義をいそしみ勤め、祭文例また祭典略といふをも撰みて、いみじき功績をたて、いとも頼もしかりけるを、いかなる禍神のまがわざにやあひ交りけん、六月の中ごろより病出て、遂に其廿一日といふ七ツ時にしも、あなへく身うせしは、いはんすべなき極にぞ有ける。かくて朝廷より非蔵人鳥居大路筑前介殿と御医森良平殿とを御使として、病床を問はしめ給ひ、葬の時にも御使者をもて金三万疋を下賜はりしは、誠に恐く難有き事にて、これぞ歎の中はいみじき悦になん。かくて亡骸をば東山なる靈山といへる所に葬めしとぞ。こは同学竹尾正胤、中山繁樹の両士むねとは事とりて姉賀唯

一、実姪竹内逸次、弟子林由太郎、社家今泉周之介等とともに万とりまかなひしとぞ。歳は五十二にて、おのれより廿歳の弟なれば、おのがなからん後の碑文をもちかねてものせられつるを、かく逆まごに見る事さへあるを、おのがわかれて家に帰るより後、正月二日の年始状といふを始、其終れる二日前十八日迄に七度の消息にて、殊に十八日の日なるは、何くれと細やかに認めて、これぞ永き訣の遺物となれるがいと悲しく、とりあへず此状のしりへに其あらましをしるすになん、  
明治二歳といふ文月の七日七十二翁

羽田野敬雄

## 二

草鹿砥氏は元來文武天皇の御代、草鹿砥公宣卿が勅使として差遣されて以來の旧家と伝えられ、代々砥鹿神社の神職を勤めてきた。  
〔和漢三才図会〕にも、「文武天皇令勅使公宣建立、賜草鹿砥氏、其子孫相統為神職」とある。砥鹿神社は三河国宝飯郡一の宮村にあり、三河の一ノ宮で、式内社に列し、「国内神名帳」には正一位砥鹿大明神と見え、徳川時代の社領百二十石、維新後国幣小社に列した。祭神は大己貴命ということになっているが、吉田東伍博士編の「大日本地名辞書」には、「俗説大己貴神を祭ると云ふも明徴なし、一宮記に載するのみ」とある。奥宮は本宮山の山頂にある。近郷の鳳来寺山の古刹鳳来寺の縁起も、文武天皇と結びつけられているが、正否ともかくとして、持統天皇の三河行幸と関係がありそうに思う。（持統天皇の三河行幸の事情については、別に考察し

たい。

宣隆は肥前守宣隆の長子で、文政元年（一八一八）四月九日の生まれである。祖父延紀が本居宣長の門下（のち破門された）であった鈴木梁満に安永二年に入門しているのをはじめ、父宣輝も天保元年三十四歳で篤胤に入門し、代々国学に勤めたらしい。宣隆は「三河国知名人士録」に、「初め八名郡豊津村田中某に就き漢学を学び、」とあるが、豊津村は一の宮村の隣村で、若いころ私塾で手習いをしたのであろう。称呼については、「人士録」に、「幼名孫十郎と云ひ、初め勘解由、通称近江又は近江守、別に崧とも云つた」として、「履歴」には、「幼十名を勘解由、一ノ名を崧山の号をば杉の金戸カネドと称へり、」とある。崧・嵩ともに「タカシ」とよみ「宣隆」の「隆」からきた隠し名らしく、崧は「長歌私編聞書」や「説門千字抄」、嵩は「説文索引」に用いている。孫十郎、勘解由は通称なるべく、杉の金戸（杉廻金戸）は雅名で、杉門主人ともある。杉の金戸・杉門主人は、砥鹿神社の境内にある杉の大樹が多いのに因んだものか。

宣隆が篤胤に入門したのは、天保五年正月、十七歳の時で、「平田篤胤門人録」天保五年正月の条に、

三河一ノ宮村 宣輝男 十七才

砥鹿神社神主 草鹿砥勘解由藤原宣隆他四名

とある。当時はまだ勘解由という通称を用いているが、翌天保六年には従五位以下に叙し、近江守に任ぜられた。（『近世名家諺辞集』には、近江守に任ぜられたのは七年としている。）

吉田東堂に学んだというのは、いつごろのことであろうか。「人

士録」には初め八名郡豊津村田中某に就き漢学を学び、次いで美濃国加納の儒者吉田東堂の塾に入り、更に平田篤胤の門に入りて皇学を修め、石塚竜麿に就て古代文字遺を研究したい」とあるが、「履歴」によると、「幼き時より才賢く、書よむ事をいみじく好みて、遠江の人八木ノ美穂によりて、古へ風の歌文をもよくものせられ、蕃学をば美濃ノ加納ノ藩士吉田ノ東堂の門に入りていそしみ学び、云々、」とあって、順序が逆である。

吉田東堂については、伊藤信著「美濃文教史要」に、「名は弘文、字は公彝、通称東一郎、東堂は其の号、加納藩主永井候の臣なり。……東堂少にして学を好み、長じて（文化末年か文政初年なるべし）江戸に遊学す。……江戸に來り佐藤一斎の門に入り、刻苦勉勵す、然も資力統かず、時に平川天神に於て売講をなせし事あり。又広く当世の士と交り、殊に卷菱湖とは親交あり。学成りて郷に帰る。藩主永井侯の憲章館を興すや、挙げられて教授となり、子弟を薰陶す。

東堂もと陽明学を奉じ、最も憂国の念深し。曾て渡辺華山と交を結び、後又佐久間象山と往復して砲術を研究し、屢々加納城外に於て大砲を試演せりと云ふ。後致仕して家を長子文実（名は太郎）に譲り、名古屋に出で、私塾を開きて徒に授く。門に入るもの多し。志士松本圭堂及び書家大竹蔭塘の如き、其の門より出づと云ふ。安政中病みて歿す。（享年未詳）。著書語字蒙五十卷、（十五行百枚許にて各巻を成せりと云ふ、今其の所在を知らず、惜むべし）あり。」とあるが、東堂が佐藤一斎の門下であること、陽明学を奉じ、憂国の念篤く、渡辺華山や佐久間象山と親交があり、砲術など洋学にも

通じたこと、志士松本圭堂、書家大竹蔭塘などが門下から出てい  
ること、など注意すべきである。

また八木美穂については、平凡社の「大百科辞典」や「大人名辞  
典」に比較的詳しい紹介があり、(ともに森敬三氏執筆)、小山正  
氏の「八木美穂伝」も刊行されている。これらによって要領を摘記  
すれば、美穂は寛政十二年(一八〇〇)遠江国(これよりさき、岡  
田東一郎撰「八木美穂先生之伝」、岡部護稿「八木美穂小伝」も発  
表されている由。)城飼郡浜野(現静岡岡県小笠郡大浜町浜野)に、  
横須賀藩大庄屋八木太郎兵衛美庸の長子として生まれた。宣長七十  
一歳、(翌年没)、篤胤二十五歳の年に当る。父は和漢の学に通  
じ、和歌や俳句をも嗜んだので、幼より家学をうけ、郷党にも学ぶ  
ところがあつたが、文政二年二十歳の時近郷白須賀の夏目龜麿(宣  
長門)に従学することになった。龜麿は文政四年郷里を出るが、美  
穂はますます攻学に努め、弘化二年四十六歳の時領出西尾隱岐守に  
知られて士籍に列し、歌道及び和漢の学を待講することになり、兼  
ねて学問所出仕を命ぜられ、また浜野村の庄屋役をも仰せつかつ  
た。嘉永三年(五十一歳)には横須賀学問所教授長に任じ、藩の子  
弟の教育に励んだ。安政五年(一八五八)六月五十五歳で世を去つ  
たが、学問所出仕は十年にわたっている。国学方面の交友広く、門  
下は数百人に及ぶという。里正としても治績をあげた。思想は神道  
国学と儒教の調和を旨としたが、常に尊皇の大義と忠孝一本を説  
き、門下から大久保忠尚・春野父子が出て、維新に際し、卒先して  
遠州報国隊を組織したのも遠く因をここに発すといわれている。あ  
わせて歌道を重んじ、「もののははれ」風流風雅の意義をも説き、

とくに万葉風の古調を尊んで、万葉仮字で書いた歌も多く見える  
が、近体の歌をも残している。主要な著書としては、書紀関係のも  
のに、「雲聚の玉陰」、「誦習庵隨筆」(「あがたじ」)、「誦習庵私説」  
、「穴賢隨筆」(「釈迦隨筆」)、「神代紀章牙増註」、古事記の註書に「約  
古事記伝」、万葉関係に、「万葉端詞例」、「姓氏百人一首」、「万葉集  
後新採百首」、「防人歌鈔」、「玉藻鈔」、「万葉集略解補闕」、「仮字ぶく  
ろ」、歌学書に「歌麻那波之良(歌学柱)」、「長歌私編」、国学思想  
を説いた「磯之松」、「仮字庭訓」、漢字関係書「加良佐比豆理」、論  
語註解「郷土誌関係の「郷里雜記」のほか、祝詞宣命や歴史地理書  
の抄録注記類も多い。中林と号し、家集「中林詠集」、「中林詠草」が  
ある。思想的立場としては儒教や仏教に対しては包容性を示してい  
るが、洋字に対しては批判的になつている点、平田派と共通する。  
宣隆が東堂に学んだというのは、恐らく東堂が加納藩を致仕して  
のち、名古屋に出て私塾を開いてからと思われ、安政に近いころで  
あろう。美穂との交渉も、天保五年宣隆が篤胤に入門してから後と  
思われるが、文久二年(一八六二)抄出の識語のある宣隆の「長歌  
私編聞書」に、「二十年前聞置ケル事ドモヲ書記スニナム」と述  
べている点からすれば、天保十三年ごろまでには交渉が始まつてい  
たと見てよいであろう。天保十三年は美穂四十三歳で、浜松で県居  
靈社修造落成式が催されているので、宣隆が平田派の同門として兄  
事した吉田(豊橋)の羽田野敬雄等とともに出かけたのかも知れな  
い。二年おいて弘化二年正月には美穂が吉田の敬雄を訪れている。  
美穂は龜麿に入門する二年前の文化十四年一八歳の時国学に志した  
と言っているが、同年には近郷新居の開所役人中山美石が吉田藩の

時習館の教官として招かれていた。美穂が麴麿に入門したのも、三河国新城（一の宮の近郷）の書籍商で歌人だった浅岡政樹であり、西遠と東三とは隣接地として、交渉を生じる可能性は多かった。したがって敬雄の録した「履歴」に記すごとく、東堂に学んだのは、美穂と交渉を生じてから後のことと見てよいと思う。「人工録」には、「石塚竜麿に就て古代文字遺を研究した」ともある。宣隆に、竜麿の著書を整理した「古言別音鈔」などの著はあるが、竜麿は文政六年六十歳で没しているので、直接の師弟関係があったとは思われない。（竜麿の没年を天保六年とする説は否定されている。）「別音鈔」を著したのは、美穂のすずめによる。

次に交友関係では、羽田野敬雄を中心とする遠江三河方面の神宮国学者との交渉はいうまでもないが、とくに敬雄には親しく兄事し、後輩としては竹尾正胤（正寛の子で、宣隆の妻は正胤の妹、）と特殊な関係にあった。また大國隆正が安政二（？）年九月吉田方面に来た際、宣隆邸をも訪れ、二泊しているが、ともに本宮山に上って、万葉風の長歌をよんだりしているのも注意される。（「三河宝飯郡誌」にこの時の兩人の長歌がのせてある）。隆正の歌格研究書「六句歌体弁」は宣隆の「旋頭歌四体」を批判訂正したものであるが、「日本歌学史」には、安政四年九月宣隆の家を訪ひて、その旋頭歌四体を読みそれに対して自説を述べしもの、とある、）宣隆の「長歌私編開書」には、「崧（宣隆）云、ナホ八木翁ノ此四件ノ歌ト私編不載歌トノ初ノ一句ヲ摘出テ、本書ノ巻数張数マタ句数ヲ注シタル目錄一卷アリシヲ、先年野之口隆正ニ據ミ去ラレタリ、」（註三）又オノレ万葉ノ長歌ヲ本集ノママニ抄出シテ、四件ノ句法、マタ

珠衣ノ句法ヲ註シ、八木翁ニ聞タル事ドモヲ書入タル本アリシヲモ隆正ニ據マレシハ、イトイト口惜クナン、ナホ、彼人ニヌスマレシ稿四五種アリ、」といったような記事がある。「ヌスマレシ」といっても、借りていったまゝ返さなかったのであろう。

宣隆の生没年時については疑問がなく、文政元年（一八一八）四月九日に生まれ、明治二年（一八六九）六月廿一日五十二歳で世を去った。京都において客死したのであるが、その経緯は「草鹿砥宣隆書簡集」によつてうかがうことができる。同書簡集はもと羽田文庫の蔵で、豊橋市立図書館の蔵書となつているが、明治二年皇学所出仕のため上京中の宣隆から、帰国中の敬雄にあてた書簡を集めたもので、付録に、中山繁樹、竹尾正胤、平田延胤等より敬雄にあてた書状や前掲の「草鹿砥宣隆履歴」等が収めてある。この書簡集により、皇学所御用の国学者間に、古事記派と日本紀派の対立があり、宣隆は古事記派の有力人物として活躍したことが知られる。そうした事情や宣隆急死の顛末等かの毒殺説も出てくる。維新史と国学との関係を考える資料としても役立つ資料である。

以上を要約すれば、宣隆は文政元年（一八一八）、三河宝飯郡一ノ宮村砥鹿神社の神職草鹿砥宣輝の長男として生まれ、通称を孫十郎・勘解由などといひ、杉廼金戸・杉門主人など号した。崧・嵩などの別名をも用いている。幼より好学で、家学をうけるとともに、天保五年十七歳の時平田篤胤に入門し、翌六年従五位に叙し近江守に任じた。国学については同学の羽田野敬雄に兄事し、影響をうけた点が多いが、天保の末ごろ、遠江の八木美穂とも交渉を生じ、歌文を学んだ。若いころ近在で漢学を学んだというが、長じてのち美

濃加納藩の儒者吉田東堂にも学び、和漢の学に造詣が深く、書道にも通じた。明治元年京都皇学所の講官を仰せつけられたが、翌二年六月京都において急病で客死した。享年五十二歳である。

小山氏の「八木美穂伝」にも、宣隆の略伝を載せているが、宣隆を単に美穂の門下として扱っているのは、誤解を招く恐れがある。

(吉田東雲は東堂の誤りであろう。) 宣隆は弱冠にして篤胤の門下となり、同門の敬雄に兄事としていたのであり、美穂と交渉を生じたのは長じてのちのことらしく、かつふつうの師弟関係と見てよいかどうか問題である。

### 三

宣隆の著書としては、佐佐木信綱博士の「日本歌学史」に、「万葉集序歌抄」・「長歌対句類集(聚)」・「天門抄」・「旋頭歌抄」等の歌格研究書が紹介されているほか、橋本進吉博士によって学界に知られた「古言別音鈔」の著がある。さらに「三河綜合図書目録」には、「求夷編」、「祭文例」、「祭典略」、「詞堂祭儀」、「神徳略述頌諺解」(下)、「葬祭私説稿」、「統參河集」、「説文索引」等の諸著があげてある。同書に、草鹿山松の著としてあげた「説文千字抄」も宣隆の著で、草鹿砥崧を草鹿山松と誤ったものらしい。また「散隸千字文」なる著書(草稿)もあったこと、「説文千字抄」の序文で自ら記しており漢字研究にはとくに傾倒した跡が見える。「二千字文略解」という著書もあって、平田家で上木の企てがあったこと、「著鹿砥宣隆書簡集」に収められた書簡によって知られる。歌格研究書としては「長歌私編聞書」というのもあるが、八木

美穂編の「長歌私編」に美穂の説の間書を加え、私見を添えたものである。右のうち、歌格研究書を除くと、漢字研究書と神道関係書が大部分を占める。

以下著書について細説したいが、すでに紙数が超過してしまったので、続稿に譲りたい。地方の学者として、著書は分類整理を主とした啓蒙的なものが多いが、深い学殖を根柢としていることをこわっておきたい。

註一、万葉端詞例は、詞書の「類型」によって万葉歌を分類したものの、「姓氏百人一首」は万葉集歌による百人一首、「万葉集後新採百道」は、真淵の「新採百首」に倣って、

万葉の名歌を抄出したもの、「防人歌鈔」は万葉集中の防人の歌を抄出したもの、「玉藻鈔」は人麿の短歌三十二首の解、「万葉集略解補闕」は千蔭の「万葉集略解」を補ったものである。(八木美穂伝)による。他にも断片的な研究があるが、「端詞例」と「略解補闕」及び「長歌私編」が万葉関係の主要著書と考えられる。

二、「日本歌学史」に紹介された「万葉長歌対句類集」以下の歌格研究書類なるべく「旋頭歌抄」もその一つらしい。「私編不載歌」については、「万葉集中不載私編長歌」と題した高須葛根の著書があるが、元来宣隆の研究に基くものであろう。

付記。筆者が宣隆に注意したのは、佐佐木信綱博士の著述を手伝っていたころ、(昭和十年前後、宣隆の孫に当たる草鹿砥祐吉氏を紹介されたのが縁であった。同郷の関

係から、宣隆などを中心に家系や郷土史を調べるようにとの先生の御配慮からであったが、小生中途で病気がちとなり、実を結ばずにしまった。が父親が死んで一年ばかり郷里に引っこんだ時に調査を続け、のち久松先生を中心とした「国学の地方分布」の共同研究の一部に三河遠江を分担し、研究報告の中に宣隆をもとりあげておいた。佐佐木博士も草鹿砥氏も今は世にないが、本誌佐佐木博士追悼号に稿を求められるまま、旧稿を補って発表することとした。謹んで御冥福を祈りたい。橋本進吉博士からも学恩をうけたが、博士も宣隆とは特殊なつながりをもっており、学縁の奇なるを思うこと切である。

△在庫誌V

上代文学

通卷十三号

¥

万葉集遺跡の復活

石井庄司

上代人と常世の国

丸山林平

外来古代文芸の変容局面

中塩清臣

『イヅチ』をめぐって

白藤礼幸

「万葉集三七一の歌」私考

佐野正巳

「君が名はあれどわが名嬉しも」卑見

万葉情意語の生成

賀古明

——「忘れ貝」・「恋忘れ貝」——